

佐佐木信綱選、銭稻孫訳『漢訳万葉集選』研究

——成立背景、出版事情、翻訳をめぐって——

鄒 双 双

Kan'yaku Man'yōshū-sen:

its Formation, Publication and Translation

Zou Shuangshuang

In 1959, the first translation of the *Man'yōshū* into classical Chinese was published, edited by Sasaki Nobutsuna and translated by Qiān Dàosūn. This one work served an important role in the transmission and reception of the *Man'yōshū* and worthy of scholarly inquiry. This book was a joint effort between Sasaki and Qiān, and was a twenty-year project filled with twists and turns. The process of the book's production can be said to reflect one aspect of Sino-Japanese cultural exchange during the crisis of the Second Sino-Japanese War (1937-1945). This essay examines the process of the *Kan'yaku Man'yōshū-sen's* formation through letters Qiān sent to Sasaki. It also clarifies the conditions surrounding the publication and the characteristics of Qiān's poetic translation.

キーワード：『万葉集』、『漢訳万葉集選』、佐佐木信綱、銭稻孫、日中文化交流

はじめに

『万葉集』は日本現存最古の歌集として古くから中国で注目されている。早くも1565年（中国明朝嘉靖44年、日本永禄8年）に編纂された『日本一鑑』に『万葉集』の名が挙げられている。近代に入り、黄遵憲は著書『日本国志』（1890年）の「卷之三十三 學術志二」に「日本古無文字而有歌謡上古以来口耳相伝漢籍東来後乃借漢字之音而填以国語如古万葉集所載和歌悉以漢字填之」¹⁾（日本古代に文字がなかったが、歌謡があり、上古以来口承で伝えられている。漢籍が日本に輸入された後、漢字の音を借用して国語に当てた。例えば、『万葉集』所載の和歌は悉く漢字に当てられている）とのように、『万葉集』が日本文字の起源を説明するための例として挙げられている。しかし、これらはいくまで書名が言及されたにとどまっている。本格的に『万葉集』が紹介され、中国語に翻訳されるようになったのは、「五・四

1) 黄遵憲『日本国志』2001年2月版（新華書店、345頁）による。

新文化運動」以後を待たなければならない。管見の限りでは、1925年『文学週報』第176号に掲載された謝六逸訳歌が漢訳『万葉集』の嚆矢となる²⁾。そして、30年代、銭稻孫も訳し始め、雑誌に発表するようになった。

しかし、それらの訳はいずれも断片的に雑誌に散在しているのみである³⁾。纏まった形で世に出た漢訳『万葉集』は、佐佐木信綱の協力を得た銭稻孫による『漢訳万葉集選』が最初である。『漢訳万葉集選』が1959年に日本学術振興会によって日本で出版された。現在のところ、選訳や全訳を含め、『万葉集』の訳本は6種類にもものぼっている⁴⁾。銭稻孫訳『漢訳万葉集選』の出版は、時間的に次の楊烈訳『万葉集』(湖南人民出版社、1984年7月)より25年も早かった。それゆえ、『万葉集』の伝播と変容を検証するうえで、『漢訳万葉集選』は価値が高い。

管見の限りでは『漢訳万葉集選』に言及したのは、小沢正夫「佐佐木信綱と万葉集の外国語訳⁵⁾」、松岡香「『万葉集』の中国訳について(その1)——銭稻孫訳を考える⁶⁾」、呉衛峰「和歌の翻訳と異文化体験の問題——銭稻孫著『漢訳万葉集選』を中心に⁷⁾」といった論考が挙げられるが、三篇とも和歌をいかに翻訳するかというところに焦点を当てて論じている。『漢訳万葉集選』の訳者や、成立背景および出版事情についての考察はこれまで皆無である。小論では、佐佐木信綱記念館で見つけた資料に依拠し、その成立や出版の背後にある事情を詳らかにしたい。

一、佐佐木信綱の念願：英訳から漢訳へ

「万葉集をよく訳して、我が上代国民の胸の底に宿っていた日本精神を外国人に示したい⁸⁾」ということが、佐佐木信綱の多年の念願の一つであった。その宿願は1940年に日本学術振興会から刊行された『英訳万葉集』によって初めて目に見える形で叶うことになる。これに関して、佐佐木信綱は次のように回想している。

日本の文化を、海外に宣揚する目的を以て、古典翻訳の事業が、日本学術振興会によつて行はれることとなり、第十七小委員会が設けられた。しかして、日本精神文化の淵源を示すものとして、

2) 謝六逸「万葉集」(『文学週報』第176期、上海：文学週報社、1925年6月7日)36～37頁。

3) 近代以降中国における『万葉集』の紹介および翻訳は、2011年2月韓国日本文化学会『日本文化学報』第48輯(2月号)に刊行予定の拙論「中国における『万葉集』の伝播とその翻訳状況について」を参照されたい。

4) 1959年銭稻孫訳のほか、楊烈訳『万葉集』(湖南人民出版社、1984年7月)、銭稻孫訳、文潔若編『万葉集精選』(中国友誼出版公司、1992年1月)、李芒訳『万葉集選：日本古代詩歌集』(北京：人民文学出版社、1998年10月)、趙樂牲訳『万葉集』(南京：訳林出版社、2002年4月)、金偉、呉彦訳『万葉集』(北京：人民文学出版社、2008年2月)がある。

5) 『国語と国文学』第65巻第4号、1988年4月1日、47～64頁。

6) 『北陸学院短期大学紀要』第21号、北陸学院短期大学、1989年12月26日、1～11頁。

7) 『東北公益文科大学総合研究論集』第12号、2007年6月30日、59～72頁。

8) 佐佐木信綱「独訳万葉集に就いて」(同『万葉集清話』、靖文社、1942年5月)62頁。

先づ万葉集が英訳されることと決定した。⁹⁾

実際の英訳作業に佐佐木信綱も参与した。歌の選出に当たっただけでなく、翻訳の基礎となる口語訳の原案を起草する委員六人の一人として、巻五から巻七までの口語訳と脚注を担当した。英訳の企画が立った六年後、小畑薫良と石井雄之助によって、選出された千首の万葉歌は全部訳了し、書として世に出た。それによって、佐佐木信綱の多年の夢が実現したことになる。

次いで、佐佐木信綱は、英訳のみならず、ドイツ語、フランス語、イタリア語、中国語など、各国語訳の『万葉集』シリーズの刊行を目指したものの¹⁰⁾、この企画は、日本学術振興会では同一の事にのみかたよることが出来ないという理由で、却下された。断念を余儀なくされているところ、佐佐木信綱は銭稻孫に出会い、『漢訳万葉集選』成立の第一歩に踏み出した。詳しくは後述するが、ここで強調しておきたいのは、『万葉集』を世界中に押し広めようとする佐佐木信綱の思いがあるからこそ、『漢訳万葉集選』の誕生が可能になった、ということである。

二、訳者の銭稻孫

『漢訳万葉集選』の成立経緯を述べる前に、訳者銭稻孫の経歴を紹介したい。銭稻孫については、これまであまり研究されていない。1991年に『読書』に文潔若氏の「我所知道的銭稻孫」が発表されたことによって、はじめて研究者の視野に入るようになったが、資料が乏しいため、いまだに不明点が多い。1887年浙江省帰安県（現湖州市吳興県）の累代書家の銭家に生まれる。祖父は、六朝の詩人鮑照の詩を唐の李商隱の駢文の注を書いた銭振倫である。父銭恂は、『史目表』（帰安銭氏、1912年）、『壬子文瀾閣所存書目—五卷』（浙江公立図書館、1923年）などの著作を有し、また叔父の銭玄同は著名な音韻学者である。このように、銭稻孫は学術的雰囲気濃厚な環境に生まれ育った。1900年留日学生監督として日本に派遣された父と共に来日し、慶応義塾幼稚舎（小学校）、成城学校（現成城中学校）、東京高等師範学校（現筑波大学）で7年間日本語教育を受ける。この留学経験の中で、銭稻孫は日本語を習得し、その後の翻訳活動を展開する土台を作ることになった。1907年、父の転勤でイタリアやベルギーに渡り、大学課程を終える。¹¹⁾

帰国後、銭稻孫は中華民国の教育部に勤務し、魯迅と同僚となり、しばらく親交を結んだことがある。1927年、清華大学に外文系の講師として招かれ、日本語や日本歴史を講じる傍ら、図書館関係の仕事や翻訳も兼ねる。1937年7月7日、盧溝橋事件が勃発する。その直後から日本の対連合軍無条件降伏の時まで、すなわち、1937年7月より1945年8月に至る8年間、北京は日本軍の占領下に置かれていた。その間、南下する多くの教授に反し、銭稻孫は北京に残る、いわゆる「留平」することにし、親日の態度

9) 佐佐木信綱「英訳万葉集に就いて」（同『万葉集清話』、靖文社、1942年5月）56頁。

10) 佐佐木信綱「独訳万葉集に就いて」（同『万葉集清話』、靖文社、1942年5月）62頁。

11) 文潔若「編後記」（銭稻孫訳『万葉集精選』、中国友誼出版社、1992年1月、280頁）、吉川幸次郎「跋」（銭稻孫訳『漢訳万葉集選』、1959年3月、日本学術振興会、196頁）、邱巍『吳興銭家：近代学術文化家族的断裂与传承』（浙江大学出版社、2010年4月、202～203頁）を参照。

を示す。1941年4月11、12日に東亜文化協議会評議員として、周作人と共に京都帝国大学で開催された東亜文化協議会文学部会に参加する。また、1942年11月3日から5日まで東京で行われた第一回大東亜文学者大会に、華北地方の代表として出席し、「大東亜戦争完遂のための文学者の協力方法」および「大東亜文学建設」について発言する。その間、『日本詩歌選』（東京文求堂書店、1941年）、『櫻花国歌話』（中国留日同学会、1943年）など訳書を出す。そのような政治立場を取ったため、北京解放後、投獄される¹²⁾。出獄した後、山東齊魯大学で医学を教え、衛生部出版社や人民文学出版社に勤め、再び翻訳活動を開始する。『近松門左衛門 井原西鶴作品選』¹³⁾がその頃の代表作に数えられる。

銭稲孫は、数多くの日本語作品を訳した。雑誌に散在するのを除き、訳書は20部近くにのぼる。文学はもちろん、音楽、歴史、美術など多岐に亘る分野の作品を取り扱った。そのためか、吉川幸次郎は「日本文学に対するまともな関心と尊敬は、今世紀にいたつてはじめておこつた。そうして本書の訳者である銭稲孫先生と、その僚友である周作人とを、先達とする¹⁴⁾」とのように、銭稲孫の日本文学に対する関心を周作人と並べて評価した。政治立場はともあれ、日本文学および日本文化の紹介という点では、銭稲孫に評価すべきところがあることは、否めない事実であろう。

では、銭稲孫が『万葉集』を翻訳する動機は何であったのか。これを解明するには、まず彼の日本文化に対する認識を見なければならない。

銭稲孫は、1934年のある談話に「瞭解文化是認識一個民族，一個國家最澈底、最直接、而且最有趣味的途徑」と述べたという¹⁵⁾。文化を理解するのがその民族および国家を知るための最も基本的な直接的な面白い方法だと認識した。文化理解を重んずる彼は、1933年に清華大学の学生を引率して日本へ旅行に発つ前に、学生に日本文化に対して次のような発言をしている。

不要以爲日本什麼東西都模仿別人，所以就看不起日本。要知道日本人的模仿往往是一種創造：什麼東西，一經日本模仿，後來常常成功（ママ）日本自己的東西了。¹⁶⁾

銭稲孫は、日本人の他文化に対する模倣は往々にして一種の創造であり、模倣を通して、自国独特の文化を形成すると、学生に教えたという。彼は「日本文化，既不是西洋文化，又不是東洋文化，乃是東西文化以外的一種文化」¹⁷⁾と述べ、日本文化は西洋文化でも東洋文化でもなく、東西文化以外の一の独特の文化だと考えた。言い換えれば、彼は日本文化は単なる中国文化、あるいは西洋文化の模倣ではなく、中国が学ぶに値するものであると認識していた。

12) 益井康一『漢奸裁判史1946-1948』（みすず書房、2009年10月、159頁）によれば、銭稲孫は1946年10月25日、河北高等法院から「懲役十年、公権剥奪六年」の判決を下されたという。しかし実際獄中にいたのは3年間である。

13) 1987年に人民文学出版社の『日本文学叢書』、1996年に人民文学出版社の『世界文学名著文庫』（精装）に収録されている。

14) 吉川幸次郎「跋」（銭稲孫訳『漢訳万葉集選』、日本学術振興会、1959年3月）195頁。

15) 顧良「周作人と銭稲孫——我所知道的兩個認識日本的人」（『宇宙風』第27期、1935年10月16日）195頁。

16) 顧良「周作人と銭稲孫——我所知道的兩個認識日本的人」（『宇宙風』第27期、1935年10月16日）195頁。

17) 顧良「周作人と銭稲孫——我所知道的兩個認識日本的人」（『宇宙風』第27期、1935年10月16日）195頁。

このような認識を持っているからこそ、銭稻孫は日本文化の紹介に取り組んだであろう。さらに『万葉集』に至って言えば、彼は次のように述べている。

换句话说，这《万叶集》是由口诵文学演变到笔撰文学的一个宝贵标本，尤其说明这日本的笔撰文学是产生在未有文字之先的。更有一层值得注意的意义就是日本所以发展其自家的文学，主要是靠其基本工具的假名，而假名的原始形态和初期的演变就见于此集。也因此，在我们考究到唐以前的音韵，这万叶假名也不无可资参考之处。

（中略）

他们一向以此集比于我国的诗三百篇，而和歌史上的每一次的歌风振作，莫不以学习、研究《万叶集》为其前提、动机的。至于其时的制度、风俗、服色、起居，以及其与我国的交往，中国思想、技术的东流之际，都足以引起我们今日的兴趣。¹⁸⁾

上記の引用文を日本語にすれば、次のようになる。

言いかえれば、『万葉集』は口承文学から記載文学へ変遷する貴重な標本であり、特に日本の記載文学が文字の創出前に誕生したことを証明している。もう一つ注目すべき意義は、日本文学が独自の文学として発展するために、基本道具として大きな役割を果たしていた仮名の原始形態と初期変化が『万葉集』に見られる、というところにある。したがって、唐以前の音韻の研究に、万葉仮名は参考に供しないわけでもないであろう。

（中略）

彼ら〔日本人〕は往々『万葉集』を我が国の詩三百篇〔『詩経』〕と見なす。和歌史上の歌風変革は、残らず『万葉集』の模倣、研究を前提、動機とした。当時の制度、風俗、服装、起居に至っては、さらに我が国との交流、中国思想や技術の日本への伝播にあたって、今日のわれわれの興味を引き付けるに値する。

このように、銭稻孫は単に『万葉集』の日本文学史における意義を承知するのみならず、「唐以前の音韻」（唐以前の音韻）、「中国思想、技术的东流」（中国思想や技術の日本への伝播）、つまり『万葉集』は中国研究にとって重要であり、紹介すべきものであると認識していた。

冒頭で述べたように、銭稻孫が『万葉集』を訳す際、佐佐木信綱から多大な協力を得た。佐佐木信綱と銭稻孫はどのように知り合ったのか。筆者の調べた限りでは、二人の初対面の時間や場所などはまだ判然としない。ただ二人とも1942年11月に開催された第一回大東亜文学者大会に参加しており、この時に顔を合わせたに違いない。佐佐木信綱は大会開会に先立つ1942年11月1日付の『東京朝日新聞』に「銭稻孫と万葉集」を掲載した。その中で次のように述べている。

18) 銭稻孫「万葉集紹介」（文潔若編『万葉集精選』（中国友誼出版公司、1992年1月）2頁。なお、「万葉集紹介」は1958年8月の雑誌『訳文』に掲載されている。

大東亜文学者大会のために北京より来らるゝ銭稲孫君に逢ふといふことは、公の喜びであり、また私の喜びでもある。さるは君は、自分の多年の希望に協力せられ、万葉集の漢訳に尽瘁してをられる故である。

(中略)

元來、銭君は日本において幼児の教育を受け、日本の学問および自然風土に親しみ深く、子息は東大医科卒業の医学士、令嬢は奈良女高師の卒業生であつて、万葉集の訳者として、こよなき適任の人である。去年の秋日本に來られた折、予は旅行中とて聴くを得なかつたが、東京帝国大学の講堂において、万葉集について述べられた講演は、來聴者に深い感銘を与へたと伝聞してをる。

これによれば、銭稲孫は1941年の秋頃、東京帝国大学の講堂で『万葉集』について述べたという。佐佐木信綱は、その時旅行中のため面会できなかった。第一回大東亜文学者大会以前に佐佐木信綱と銭稲孫が面会した、という証拠はない。恐らく二人の初対面はその第一回大東亜文学者大会の時なのではないかと推測される。また、佐佐木信綱は銭稲孫を「万葉集の訳者として、こよなき適任の人」として、彼の翻訳能力に信頼を寄せた、ということが上掲の文章からわかる。

三、『漢訳万葉集選』の成立事情について

本章では、「漢訳万葉集選」そのものに対して、翻訳のプロセス、翻訳代金そして出版期日について考察する。

1 翻訳のプロセス

『漢訳万葉集選』の出版に至るまでの道のりは、容易なものではなかった。翻訳から出版までの過程において、佐佐木信綱をはじめとする多くの日本人の協力が加わりつつも、幾度の困難に見舞われた。本節では、その過程を詳らかにしたい。

前章に述べたように、佐佐木信綱と銭稲孫の面会が確認できたのは、1942年11月の時だけである。しかし、二人は早くから消息を交わすような間柄となった。これは二人の書簡のやりとりによって裏付けられる。書簡の中身については、別稿で詳述したが¹⁹⁾、ここで簡単に紹介しておく。年代別の通数は次の通りである。

19) 鄒双及「銭稲孫訳一九五九年版『漢訳万葉集選』の成立経緯——佐佐木信綱宛銭稲孫未発表書簡十二通、鈴木虎雄書簡一通——」(『国文学』第95号、関西大学国文学会、2011年3月)を参照されたい。

年代	通数	月日
1940	2	1.11、10.1
1941	4	1.4、2.8、2.10、2.28
1942	1	1.15
1944	2	1.19、2.3
1955	2	12.15、5.14
1958	1	8.30
合計	12	

表からわかるように、佐佐木信綱と銭稻孫は、1940年からすでに文通するような間柄であった。また、書簡は、40年代前半に多く9通あり、50年代後半に3通ある。1945年から1955年までの10年間には文通が残っていないことに容易に気づくであろう。

1937年から1945年の間、北京は日本の占領下に置かれていた。銭稻孫は1940年「北京大学」の初学長になり、また同年11月から北京大学図書館館長を兼任していた。そのため、日中両国が戦争中にもかかわらず、佐佐木信綱と順調に文通のやりとりを続けることができた。1945年の終戦後、北京は日本占領下から解放されたと共に、銭稻孫は政治的立場を問われ、投獄された。それで、連絡が途絶えた。1955年になり、新中国が既に成立し、日本とはまだ膠着、対立状態の中にあつたが、銭稻孫は釈放され、出版社に勤めるようになった。こうなつて初めて文通の再開が出来たわけである。その時、佐佐木信綱はもう数え年84歳の高齢で、銭稻孫も69歳であった。

書簡の内容から『漢訳万葉集選』が成立に至つたプロセスを見てみよう。

1940年10月1日の書簡に次のようなことが書いてある。

先月杉先生当地に見へて 先生よりの御恵贈書拝領 早速文集に見ゆる 第一篇を写し取りて昨
今日本文読本に当て学生と共に講読致し居り候 その節杉先生より色々萬葉訳の件に就き承はり
て一代の光栄と存じ候 ただ不学不文果して訳し終せらるゝやを虞れ居り候 昨日又杉先生より書
簡賜はれ 愈々心得固めて努め見む 何卒随時御指導御鞭撻賜はれ度奉願候

書簡の中の「杉先生」は、杉栄三郎のことである²⁰⁾。書簡によれば、杉栄三郎が1940年9月に銭稻孫を訪ね、佐佐木信綱の『万葉集』漢訳の希望を伝えたようである。

そのうえ、杉栄三郎は銭稻孫に「文集」を齎したという。実は、銭稻孫の書簡を通して見てみれば、佐佐木信綱は、銭稻孫の翻訳に際し、万葉図録や辞典などの参考書を提供し、難訳の歌を説明し、翻訳作業の過程において助力していたことが分かる。例えば、1944年2月3日の書簡に、「只今巻十六に入り候 竹取翁の歌誠に難解を極め候 その口語訳賜はれ度願上候」とある。「竹取翁の歌」というのは、『万葉集』第3791首の長歌である。銭稻孫は、この歌の理解に行き詰まったため、佐佐木信綱に解釈を求めたのである。つまり、佐佐木信綱は、『万葉集』の漢訳においては、銭稻孫に任せきりにせず協力的であ

20) 佐佐木信綱「銭稻孫と万葉集」（『東京朝日新聞』1942年11月1日）の中に「杉栄三郎博士の紹介で、銭稻孫君に万葉の秀歌三百篇の漢訳を委嘱することとした」とあるため、「杉先生」が杉栄三郎であることが推察される。

った。

協力的というより、むしろ佐佐木信綱が翻訳過程において欠かせない存在であると言ったほうが適切であろう。というのは、彼は自ら万葉歌を選んだのである²¹⁾。翻訳は佐佐木信綱の指示に従って進められたようである。1941年2月10日の書簡に「三四月頃には上京の機会有之べく候得共 その間にも一二巻訳を進め度く存じ候間 御多忙中 恐れ多く候へども 至急御指示あらむこと偏に冀上候」とあり、また、1941年2月28日の書簡に「先般郵便を以て巻三の訳稿に差上候 相届き候や 今後訳すべき歌御選定願度候」とある。銭稲孫は、佐佐木信綱の指定した歌を訳了してから、次の指示を待たねばならなかった。それに加わり、佐佐木信綱に「銭君の訳稿の成るや東京において、詩人前川三郎、橋本成文の二君が検討され、次第に進行しつつあるのである」²²⁾、そして「漢訳には市村瓊次郎、独訳には木村謹治博士に校閲してもらふ」²³⁾ という記述がある。

流れをまとめて言えば、銭稲孫が佐佐木信綱の指定した巻を訳し上げれば、手稿を佐佐木信綱の手元に送り、東洋史学者の市村瓊次郎、詩人前川三郎、橋本成文がその手稿を校閲し、それから、佐佐木信綱が次の指示を出す、というプロセスであった。

1944年2月3日の書簡に、銭稲孫が「今年中には全部訳了の心掛に御座候」と述べているように、翻訳作業が順調に運ばれ、間もなくすべて出来上がりそうになるところ、日中戦争は終戦を迎えた。それ以来、銭稲孫と佐佐木信綱の間の連絡も途絶えてしまい、漢訳『万葉集』の出版も見送りになった。再び連絡が取れるようになったのは、1955年であった。1955年12月15日の書簡に、「思ひもうけぬ遙々海原のかなたより懐かしきおん音信 嬉しさのあまり 拝誦の目も曇りぬ わけて御親筆の落款つらつら眺め入りて十幾年かのむかし偲ばれ候」と銭稲孫が綴り、佐佐木信綱の手紙を受け取った時の感無量の様子を表した。その時、銭稲孫は、はじめて訳稿に不着の部分があるのを知り、改めて補訳を行った。こうして出来た原稿は、亡くなった市村瓊次郎の代わりに鈴木虎雄によって校閲され、ようやく出版に臨む状態になった。そして、京都大学の吉川幸次郎の斡旋によって日本学術振興会から出版経費を得て、『漢訳万葉集選』が出版できたという次第である。

2 翻訳代金

本節では、『漢訳万葉集選』の翻訳作業に掛かった費用について述べたい。

「自分は漢訳は中日実業協会、独訳は原田積善会の援助を受けて両君〔銭稲孫、ツァヘルト〕に依頼し、両君は喜んで翻訳に従事されることとなった」²⁴⁾ という佐佐木信綱の回想によれば、佐佐木信綱の依頼を受け、翻訳に従事する銭稲孫の報労は、中日実業協会によって賄われたという。中日実業協会につ

21) ただし、『漢訳万葉集選』に収録された万葉歌はすべて佐佐木信綱の選によるのではなく、銭稲孫「日本古典万葉集選訳序」（『漢訳万葉集選』日本学術振興会、1959年3月、2～3頁）にある「于是其万叶学泰斗佐佐木竹柏园先生名信綱、为选集中英华二百八十许篇、助予成之。遂逐译所选各歌、录其原汉文之题与跋而略加疏说。别以己意增选二十余章、合为三百余篇」という記述によれば、銭稲孫の意思によって加えられた二十余句がある。

22) 佐佐木信綱「銭稲孫と万葉集」（『東京朝日新聞』1942年11月1日）。

23) 佐佐木信綱「漢訳万葉集選縁起」（『漢訳万葉集選』日本学術振興会、1959年3月）186頁。

24) 佐佐木信綱「漢訳万葉集選縁起」（『漢訳万葉集選』日本学術振興会、1959年3月）186頁。

いては、1935年10月12日付の『中外商業新報』に次のような報道がある。

訪日支那經濟視察団と日本実業家側との懇談の結果愈々設立に決定した日支經濟提携常設機關の設置に関しては十一日日支双方各三名の小委員で協議の結果機關組織の大綱を左の如く決定、視察団帰国の上日支両国で同時に發起人会を開き正式設立を見ることとなつた。組織大綱 △名称 中日実業協會 △目的 日華両国の親善並に經濟提携の促進を図る △組織 日華両国実業家を網羅す △本部 東京及び上海の両市に置く △役員 会長を二名とし日華両国より各一名を選ぶ副会長常務理事等を置く △總會 毎年一回とし日華両国において隔年交互に開催す △常務理事会 日華双方において定期に開催す。

この報道で日支実業協會の性質と実態がわかる。つまり、日支実業協會は、文字通り、日本と中国の実業界の連盟組織である。佐佐木信綱の回想に間違いがなければ、錢稻孫の翻訳代金は両国の実業界によって支払われたはずである。ところが、筆者は佐佐木信綱記念館で信綱が出した「外国為替買入許可申請書」と、これに応じる信綱宛の「許可通知書」を見つけた。これらによれば、日支実業協會による支払は信綱の記憶錯誤であることがわかる。二件の中身を写すと、次のようになる（図5～図7参照）。

日銀昭拾九第六卷八叁號
許可通知書
別紙申請ノ件本日許可相成タリ
右及通知候也
昭和拾九年七月二十四日
日本銀行總裁 澁澤敬三（朱印）

申請書式第一號（第十一條）
外國爲替買入許可申請書
大藏大臣 石渡莊太郎 殿
申請者ノ住所 東京都本郷区西片町十番地
職業 著述業
昭和 年 月 日 氏名又ハ商號 帝國學士院會員
（代表者氏名）佐佐木信綱（朱印）
標題の件左ノ通及申請候也
一 爲替ノ種類及金額 電信送金
金額 金貳千五百円也
二 爲替ノ受取人ノ住所、職業及氏名又ハ商號
中華民國北京西城受壁胡同九号 北京大学學長 錢稻孫
三 爲替ノ支拂地、支拂期日並ニ支拂人ノ住所、職業及氏名又ハ商號

中華民國北京銀行業 朝鮮銀行北京支店

四 現物又ハ豫約ノ別及豫約ニ在リテハ受渡期

現物

五 賣渡人ノ住所、職業及氏名又ハ商號

東京都日本橋区室町二丁目一番地一
銀行業 株式會社帝國銀行東京支店

六 買入ノ豫定時期

御許可後一ヶ月以内

七 買入ノ目的其ノ他之ヲ必要トスル事由

中華民國南京ナレ中日文化協會ノ贊助ニカ、ル万葉集

漢訳ニ就イテノ謝礼の一部（最終額）

八 其ノ他参考トナルベキ事項

これによると、佐佐木信綱が中日文化協會の援助を得て錢稻孫に翻訳報酬を支払ったことは明らかである。そうであれば、佐佐木信綱の記憶した「中日実業協會の援助」は、おそらく「中日文化協會」の誤りであろう。

中日文化協會は1940年7月28日に南京東亜クラブで創立された。創立の準備費用として、汪精衛偽国民政府は五万元を用意し、それに加わり、毎月二万元の補助を経営に当てる。他方、日本政府も、毎月一万円の経常費を提供したという²⁵⁾。つまり、中日文化協會は、日本政府そして親日の汪偽国民政府の提携によって立ち上がったのである。中日経済提携、善隣友好、共同反共を活動の基調とし、東方文明を發揚し、善隣友好を達成することを宗旨とし、中日文化上の疎通を中日親善の重要な手段とし、大東亜の文化再建や東亜新秩序の建設を目的とする²⁶⁾。中日文化協會が政治的色彩を帯びていることは明白である。

また、上掲資料から、佐佐木信綱は、2500円に相当する中国元を帝国銀行東京支店で買い入れ、さらに中華民國の朝鮮銀行北京支店を通して錢稻孫に支払った、ということがわかる。「中華民國□□中日文化協會ノ贊助ニカ、ル万葉集漢訳ニ就イテノ謝礼の一部（最終額）」によって、この2500円は確かに『万葉集』漢訳の報酬の一部であることが確認される。「一部（最終額）」というのは、分割の形で支払ったのを示している。現在の金銭感覚では、2500円は大した金額ではないが、当時にしては相当なる大金である。甲賀忠一等編『明治、大正、昭和、平成物価の文化大事典』（展望社、2008年7月）272頁。1944年東京大学の授業料は120円、慶応義塾大学は350円、早稲田大学は340円であった²⁷⁾。月刊総合雑誌『文芸春秋』の定価はわずか50銭であった²⁸⁾。換算すれば、錢稻孫に支払った最終回の翻訳代金は、東京大学の授業料の20年分あ

25) 叶美霞「“中日文化協會” 述評」（『民国档案』2000年3月）96頁。

26) 叶美霞「“中日文化協會” 述評」（『民国档案』2000年3月）96頁。

27) 甲賀忠一等編『明治、大正、昭和、平成物価の文化大事典』（展望社、2008年7月）272頁。

28) 甲賀忠一等編『明治、大正、昭和、平成物価の文化大事典』（展望社、2008年7月）323頁。

まりに相当する。この金額は、佐佐木信綱が中日文化協会から多額の賛助を得て、つよくバックアップされたことを説いている。また、サポーターとしての中日文化協会は、『万葉集』の漢訳に期待を寄せていたと察知できるであろう。

3 出版期日

『漢訳万葉集選』の奥付を見れば、「昭和三十四年三月二十五日 印刷 昭和三十四年三月三十日発行」となっているが、実際の出版時間は、そうではなかった。本当の出版期日を明かすには、まず、『漢訳万葉集選』の構成を見る必要がある。構成は次のようになっている。

目次

錢稻孫「日本古典万葉集選訳序」：1頁

巻一～巻二十の訳文、注釈：5～183頁

佐佐木信綱「漢訳万葉集縁起」：185～188頁

新村出「後語」：189～191頁

吉川幸次郎「跋」：193～198頁

そのうち、佐佐木信綱「漢訳万葉集選縁起」の文末に執筆時間を「昭和三四・五」と記し、新村出「後語」の文末に「昭和三十四年五月一日」があり、吉川幸次郎「跋」文末にも「昭和三十四年五月五日 京都大学文学部中国文学研究室において」という文がある。

不思議なことに、錢稻孫の「日本古典万葉集選訳序」を除き、佐佐木信綱の「漢訳万葉集選縁起」、新村出の「後語」、および吉川幸次郎の「跋」が、皆奥付の出版時間以降の「昭和三十四年五月」に書かれた。佐佐木信綱、新村出そして吉川幸次郎は、三人そろって、日付を間違える可能性は、まずないであろう。しかし、三人の記述が正しいとすれば、奥付の期日と辻褃が合わない。これは、いったいどういうことであろうか。

佐佐木信綱の回想録『明治大正昭和の人々』の「市村瓊次郎」の項に、次のような記述がある。

自分が「漢訳万葉集」を企図して、滞日中なる北京の錢稻孫氏に其の訳を委嘱し、市村博士及びその信頼せられる二詩人に校閲を嘱した。詩三百篇にならつて、集中の長短歌三百首を抄出した。殆ど完成したやうであつたが、戦時中北京に帰られた錢氏からは其の後、音信も絶え、校閲を快諾された博士も遠逝せられた。万葉学の上ではもとより、補助をされた会に対しても、まことに遺憾に思つてをる。

（中略）

附記二 錢君のは後に完成し、鈴木虎雄博士に校閲を請ひ、出版については、新村出博士を経て京大の吉川幸次郎博士が努力せられ、文部省の補助を得て、昭和三十四年六月に「漢訳万葉集」と

して日本学術振興会から出版されたことは喜ばしい。²⁹⁾ (傍点は筆者より)

この記述から見れば、「昭和三十四年六月」、すなわち1959年6月が、『漢訳万葉集選』の正確な出版期日であろう。では、なぜ奥付に「昭和三十四年三月三十日」とあるのか。可能性として考えられるのは二つある。一つは、印刷の誤植である。しかし、印刷の誤植は、めったに生じないことであり、可能性としては非常に低い。もう一つは、出版費用に関わる特別な事情があるのではないかと思われる。新村出の「後語」に、『漢訳万葉集選』の出版費用について次のように述べられている。

昨年〔一九五五年〕五月中旬、日本学士院よりの帰途、歌選英訳の事業にも、附驥して参加した等の因縁の親遠なるより、熱海の凌寒荘に老を養って棲遅される佐佐木信綱博士をお尋ねした折に、老博士から万葉集抄を、英訳本以外に、広く亜欧米諸国語に訳出して、斯の集の精華を示したいものだ、との抱負を私に披瀝せられ、(中略)速かに出版したいものだとの希望を切述されたのであった。

帰洛の後、私は、畏友吉川幸次郎博士に、右の趣を告げたところ、〔一九五八年〕夏季中、同博士の東上の好機に由つて、現在の学術振興会理事長の高垣寅次郎博士に打明けられ、幸にして其の協力を得ることとなり、文部省より相当の研究費の補助を得るに至った。³⁰⁾

80歳を迎えた佐佐木信綱は、もう自ら出版に奔走するのが難しくなったため、訪問に来た新村出に銭稻孫訳の『万葉集』を出版したいとの希望を打ち明けた。それで、新村出と吉川幸次郎の努力で、日本学術振興会より出版補助を得た。1958年度、すなわち1958年4月1日から1959年3月31日までの文部省の補助による出版物であるからには、その出版も文部省の年度予算に反映されなければならない。したがって、実際の出版が翌年度の6月になるにもかかわらず、敢えて奥付に「昭和三十四年三月三十日発行」と書いたのではないかと考えられる。

四、『漢訳万葉集選』の翻訳手法

『万葉集』、ひいては短歌をどのように翻訳すべきかは、未だに物議の対象になっている。一定の基準がないため、訳し方は訳者に任せることになっている。例えば、2002年に出版された漢訳『万葉集』(訳林出版社、2002年4月)の訳者である趙樂牲は、従来の『万葉集』翻訳の問題は、主に短歌にあり、「古奥」「添加」「装飾」「改装」といった問題が存在すると考える³¹⁾。そのため、趙樂牲は折衷して現代口語の旧詩形式を用いて『万葉集』を訳したことにした。また、2008年に出版の金偉、呉彦訳『万葉集』(人

29) 佐佐木信綱『明治大正昭和の人々』(新樹社、1961年3月第五版)28頁。

30) 新村出「後語」(『漢訳万葉集選』日本学術振興会、1959年3月)189~190頁。

31) 趙樂牲「訳序」(『万葉集』訳林出版社、2002年4月)4頁。

民文学出版社、2008年2月）は、完全に形式に拘らない口語訳となっている³²⁾。

では、銭稲孫が『漢訳万葉集選』において具体的にどのように万葉歌を中国詩に訳したのか。本章では、形式、用語という二つの面から考察していきたい。

1 『詩経』への執着

銭稲孫は「日本古典万葉集選訳序」に自身が選んだ基本的な形式とその理由について次のように述べている。

竊惟日本我近鄰，我之通其文者且濟濟。而瀏覽罕及其古典，將知彼之謂何？爰不自揣，妄試韻譯。以擬古之句調，庶見原文之時代與風格。³³⁾

銭稲孫は、「以擬古之句調，庶見原文之時代與風格」と言い、原文の時代的雰囲気と風格を少しでも保持したいとの思いで、擬古の句調を用いて万葉歌を訳すことにした。無論、古調で日本古歌の雰囲気を訳詩に纏いつけるのが彼の理想である。同時に、古調で訳すのは、実際の翻訳を実行していくうえで迫られた選択肢でもある。沈策の「也談談和歌漢訳問題」には、銭稲孫に関して下記のような記述がある。

二十余年前（一九五七年），钱稻孙先生和我谈到《万叶集》翻译工作时，他说：“中国语言是单音节语，日本语言是复音节语。两种音节不同的语言，想求得格调上的一致是不可能的。”³⁴⁾

これによれば、1957年に、銭稲孫は沈策と『万葉集』の翻訳について話し合った時、「中国語が単音節語、日本語が復音節語である。音節が違う二つの言語間、格調上的一致を求めるのが不可能である」と述べたという。もちろん、銭稲孫の言う「中国語」はおそらく中国文語のことである。このように、銭稲孫は、音節における中国語と日本語の差異を考慮に入れ、和歌元来の格調に従わず、代わりに中国古調を選んだのである。

また、「古調」とは言え、決して一通りの形式ではない。『漢訳万葉集選』を通覧すれば、銭稲孫が多様な形式を取り上げたことがわかる。筆者は、『漢訳万葉集選』に訳歌に対し形式によって統計を行った。下掲の表のとおりである。

形式	四言短詩	四言長詩	五言短詩	五言長詩	七言短詩	七言長詩	交り韻詩
首数	64	7	100	53	12	27	48

（注：六句以上の詩を「長詩」とする。）

上表に示したように、『漢訳万葉集選』に収録された311首のうち、四言、五言、そして七言を用いて

32) これまで出現した『万葉集』漢訳本について、鄒双双「中国における『万葉集』の伝播とその翻訳状況について」（『日本文化学報』第48輯、韓国日本文化学会、2011年2月）に詳しく論じられている。

33) 銭稲孫「日本古典万葉集選訳序」（『漢訳万葉集選』日本学術振興会、1959年3月）2頁。

34) 沈策「也談談和歌漢訳問題」（『日語学習与研究』1981年第3期）29頁。

訳すのが大部分である。しかも、ごくわずかな例外もあるが、ほとんどの詩が韻を踏む。その他、三言や、四言、五言、六言、七言、八言などが不規則に混同する場合もある。四言は『詩経』に典型的に見られ、五言は漢に興り、六朝時代に流行った詩形である。また、唐代に移り、絶句と律詩が中国の古典的定型詩として完成するにしたいが、五言と七言は中国人にも日本人にも一番幅広く馴染まれた形式となった。

『漢訳万葉集選』において短歌を訳す場合は、五言が最も使われ、それに次ぎ四言が多く用いられた。なぜ五言に次ぐのは七言ではなくて四言であろう。翻訳上の便宜と体裁の考慮という二つの理由が考えられる。

まず、短歌は限られた三十一文字である。万葉仮名で数えた三十一文字は、中国漢字の三十一言の表現内容より遙かに限定されている。したがって、二十八文字の七言絶句より四言、あるいは五言の方は、内容的により短歌に対応しやすい。例えば、『万葉集』の第八番の持統天皇の歌は、次のように訳されている。

春既徂歟 夏其來諸 有暴白紵 香山之陬

(春過ぎて夏来たるらし白たへの衣干したり天の香具山)³⁵⁾

逆に長歌の場合は、訳詩の長さを考慮すれば四言より七言の方が相応しいようである。『漢訳万葉集選』の長い長歌は、五言または七言で訳されていることが見られる。

もう一つ考えられる理由は、訳者の銭稻孫が『詩経』の体裁を強く意識したことであろう。文学史における意義では、『万葉集』は日本の最初の歌集として中国の『詩経』に相当する。『詩経』は合計305篇詩が収録されたことから、「詩三百」と略称される。『漢訳万葉集選』の選者である佐佐木信綱も「詩三百篇にならつて、集中の長短歌三百首を抄出した」³⁶⁾と述べる。銭稻孫は佐佐木信綱の『詩経』に倣う意図を察したに違いない。したがって、できる限り『漢訳万葉集選』を『詩経』に近づけるよう、『詩経』に常用された四言と五言を駆使したのではないかと推測される。これは、旋頭歌の訳し方から裏付けられる。五七七五七七の旋頭歌は、ほとんど六句の四言詩に訳されている。作者は不明であるが、第一二七三番の歌を例に挙げる。

君波豆麻 住吉之豪 乗馬著袍 誰爲縫袍 綾織漢女 實服其勞

(住吉の波豆麻の君が馬乗衣さひづらふ漢女をすえて縫へる衣ぞ)

文字数だけを考えれば、旋頭歌を七言絶句に訳しても良さそうであるが、敢えて四言にしたのは、おそらく『詩経』のような体裁への執着があったのであろう。因みに、『詩経』への執着は、用語にも表れている。例えば、音調を整え、強調や感嘆を表す「兮」という助字の使用である。『詩経』305首のうち、

35) 本論で引用した万葉歌は1999年5月に岩波文庫版『新日本古典文学大系 万葉集』から抜粋されたものである。

36) 佐佐木信綱『明治大正昭和の人々』(新樹社、1961年3月25日第五版)28頁。

127首に「兮」が使われている。例えば、『詩経』の「国風・衛風・伯兮」に「伯兮喆兮，邦之桀兮」がある。『漢訳万葉集選』にも「兮」がしばしば見られる。『万葉集』第一首の雄略天皇の歌を見てみる。

筐兮明筐 携在旁 圭兮利圭 執在掌 之妹者子 採菜在岡 家其焉居 曷昭爾名 天藍茲大和
率維我所居 率維我所坐 我斯則告兮 我名亦我家兮
(籠もよ み籠持ち ふくしもよ みふくし持ち この岡に 菜摘ます兒 家告らな 名告らさね
そらつみ 大和の国は おしなべて 我こそ居れ しきなべて 我こそいませ 我こそは 告らめ
家をも名をも)

主語提示として訳詩の文中に、また詠嘆の働きをするものとして文末に「兮」が多く使用されたことは、錢稻孫が『詩経』を意識したことを裏付けている。

言うまでもなく、凡ての歌を整然たる四言、五言、あるいは七言に対応させるわけでもない。対応しきれない時もある。上表に挙げた「交り詩」というのは、一首に三言や四言、五言、六言、七言などが混在する詩のことを指し示している。錢稻孫が翻訳を実行していく際、『詩経』に近い体裁を拵えたいという執着を示す一方、柔軟性も見せ、最も適切な形式を考案する。そのような翻訳姿勢から、錢稻孫の学問に対する厳格かつ慎重な態度だけでなく、『万葉集』への愛着も垣間見ることができよう。

2 用語をめぐる

錢稻孫は『漢訳万葉集選』において古調訳、つまり韻文訳を試みた。韻文訳には文語訳と口語訳が分かれるが、錢稻孫は文語を用いた。彼の古調文語の翻訳に対して、同じく翻訳家の李芒³⁷⁾は

据我看，他无论在正确理解和表达原歌的内容，还是在译歌的形式，如遣词造句等方面，都达到了相当高的水平，值得效法之处不少。³⁸⁾

とあるように、正確に原歌の内容を理解、表現する面にしても、訳歌の形式、例えば言葉づかいなどの面にしても、相当高いレベルに達しており、倣うに値するところが少なくないと高く評価した。他方、下記のように錢稻孫の用語について首肯しがたい見方も示した。

他的大部分译歌，都用的是《诗经》笔法，文字过于古奥，一般读者很难读懂。它同《万叶集》原歌的古文相比，似乎有一定的距离，也就是说，原歌并不象译歌那么难懂。这种译法不利于让更多的中国读者了解《万叶集》，恐怕是不可取的。³⁹⁾

37) 李芒（1920～2000年）、日本文学研究家、遼寧省出身。若い頃、映画の脚本作り、翻訳に携わる。1959年『訳文』編集部に転入し、日本文学の翻訳仕事をはじめ。後、外国文学研究所に移り、日本文学の研究に専念し、中国の日本文学研究会副会長、会長を歴任し、1990年中国の和歌俳句研究会会長を務める。1998年訳著『万葉集選』を出す。

38) 李芒「和歌漢訳問題小議」（『日語学習与研究』第1期、1979年3月2日）38頁。

39) 李芒「和歌漢訳問題小議」（『日語学習与研究』第1期、1979年3月）38頁。

要するに、李芒にしてみれば、錢稻孫の大部分の訳歌は、言葉が古めかしくて普通の読者には難解であり、より多くの中国読者に『万葉集』を知ってもらうのに不利である。錢稻孫より34歳年少の李芒にさえ難しければ、漢詩が完全に衰退した半世紀後の今日では、錢稻孫の訳詩の難解度が更に増したのであろう。その第一の理由は、訳詩に読めない漢字が多いことである。訳詩に、現在の常用漢字以外の旧漢字が多く、不慣れな人は、どうしても挫折するのである。例えば、前掲した例でもあるが、

春既徂歟 夏其來諸 有暴白紵 香山之陬
(春過ぎて夏来たるらし白たへの衣干したり天の香具山)

に、ただ十六文字のうち、「徂」「紵」「陬」という即座に読めない文字が三つ入っている。よほど中国古典の教養を持つ人でなければ、澁みもなく滑らかに読み、正確に意味を読み取ることはできない。しかし他方では、同時代の中国研究家吉川幸次郎は錢稻孫の訳詩を「中国の詩としても美しい限りである」⁴⁰⁾と絶賛している。「美しい限り」というのは、韻律も用語も考えたうえで与えた評価のはずである。そうならば、錢稻孫訳詩の用語は同時代にとってさほど難解ではないとも言える。

しかしながら、文語は口語より比較的洗練された言葉として、簡潔に『万葉集』原歌の意味を表現することができる。様々な形式を用いたとはいえ、時々『詩経』風の体裁、あるいは絶句や排律のような形式を整えるために、原歌にない意味も訳詩に添加せざるを得ない場合もある。万葉研究家の伊藤博は書評「錢稻孫訳『漢訳万葉集選』」に、錢稻孫の翻訳が全般的には意識より直訳の逐語訳であると述べながら、場合によって原歌の意味が拡張されたこともあると指摘した。例えば、「信濃なる千曲の川のさざれ石も君し踐みてば玉と拾はむ」(巻十四・三四〇〇)の「さざれ石」を「多石如拳」と訳し、「石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか」(巻二・一三一)を、「石見今高角山 丛林中今我袖飛 妹望預今在戸 其亦我兮见解」と訳すのは、原文と離れすぎているようで、やや抵抗を感じないでもないという。⁴¹⁾

形式、表現そして原歌の内容をどのように融合していくかは、翻訳家の実際の作業中に避けられない課題である。錢稻孫もそういった問題に直面して悩んだであろう。『万葉集』漢訳の先駆として、彼の苦悩そして回答への模索は、後の『万葉集』翻訳者に大いに参考になったであろう。

おわりに

以上、『漢訳万葉集選』をめぐって、翻訳のプロセス、翻訳代金、翻訳手法など問題について詳細に考察してきた。佐佐木信綱の『万葉集』を世界に広げようとする強い思いは、『漢訳万葉集選』の成立の端緒と言ってもよい。また、訳者の錢稻孫は、日中戦争期には煙たがれる親日派に身を置きながらも、人並みはずれた日本語能力を活かし日本文学や文化を絶えず中国に紹介しようとした人物である。二人が

40) 吉川幸次郎「跋」(『漢訳万葉集選』日本学術振興会、1959年3月)197頁。

41) 伊藤博「錢稻孫訳『漢訳万葉集選』」(『万葉』萬葉学会、1960年7月15日)54頁。

意気投合し、『漢訳万葉集選』を表したのである。翻訳作業は、中日文化協会という政治的色彩を帯びる組織から多額の金銭援助を受けたうえで実行された。また、錢稻孫は『詩経』を意識しながら翻訳した痕跡が窺える。しかしながら、悉く『詩経』風にすることができないため、実際に多様な詩形式を対応させた。

また、『漢訳万葉集選』の成立過程は、単なる『万葉集』の伝播に対する佐佐木信綱と錢稻孫の熱意と努力を示しただけでなく、日中戦争期（1937～1945）という非常時における日中文化交渉の知られざる一側面も物語っている。

本稿は2010年11月に国文学研究資料館によって開催された「第34回国際日本文学研究集会『書物としての可能性－日本文学がカタチになるまで－』」で発表したものである。

本稿に使用された佐佐木信綱と錢稻孫の書簡、および「外国為替買入許可申請書」、「許可通知書」など資料は佐佐木信綱記念館の提供によるもので、厚くお礼を申し上げます。

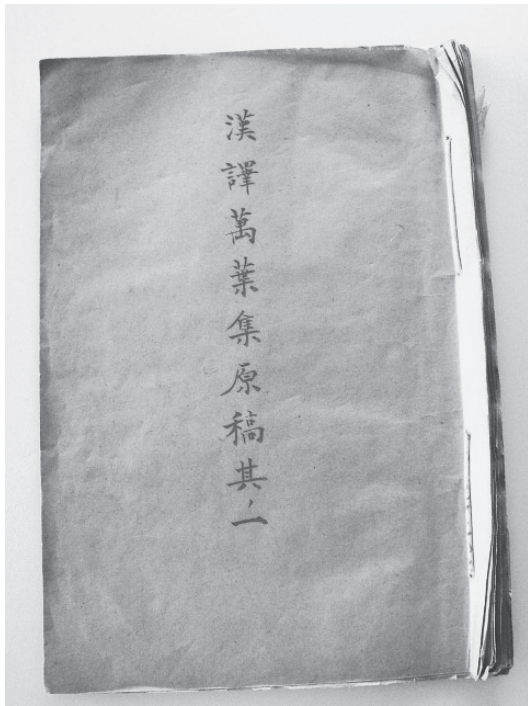


図1 銭稻孫漢訳万葉集原稿(表紙)

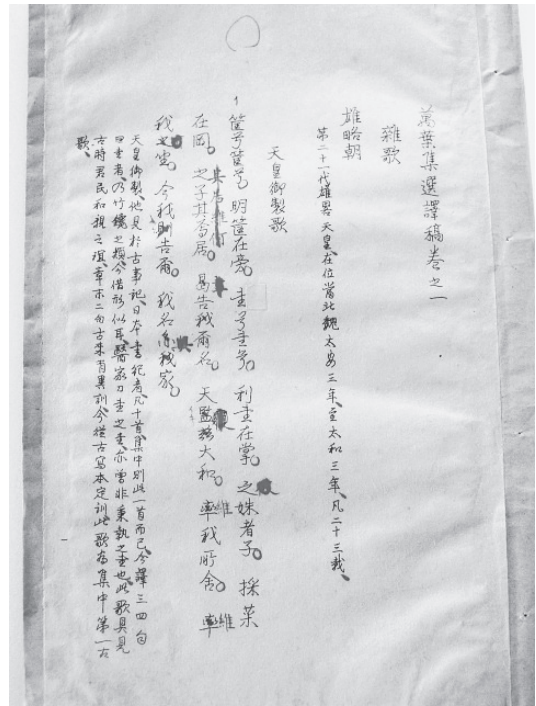


図2 銭稻孫漢訳万葉集原稿

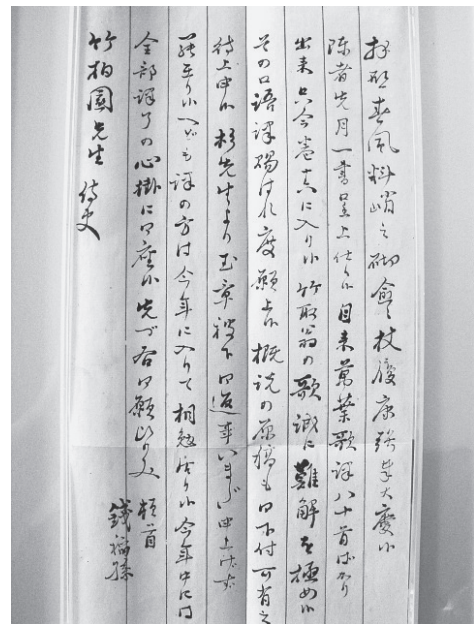
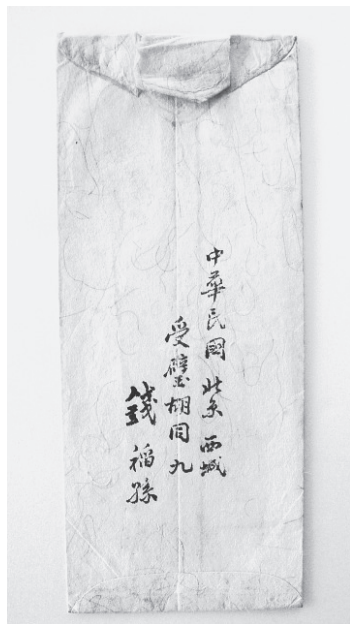
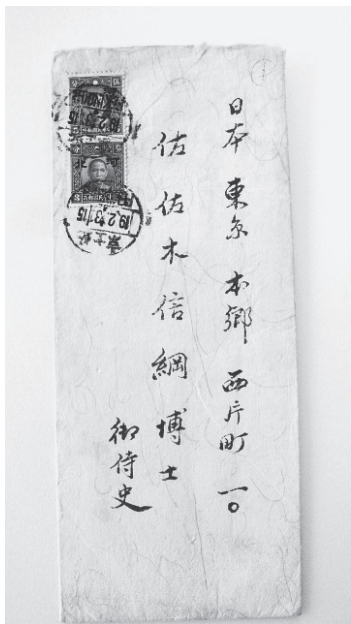


図3 佐佐木信綱宛銭稻孫書簡

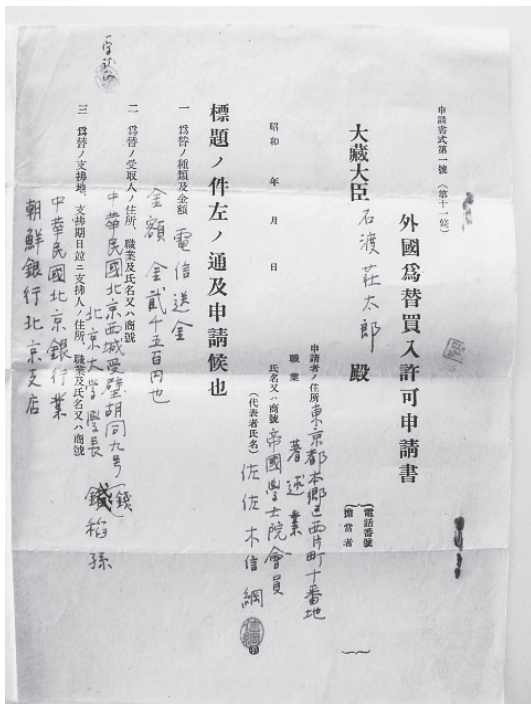


図4 外國為替買入許可申請書

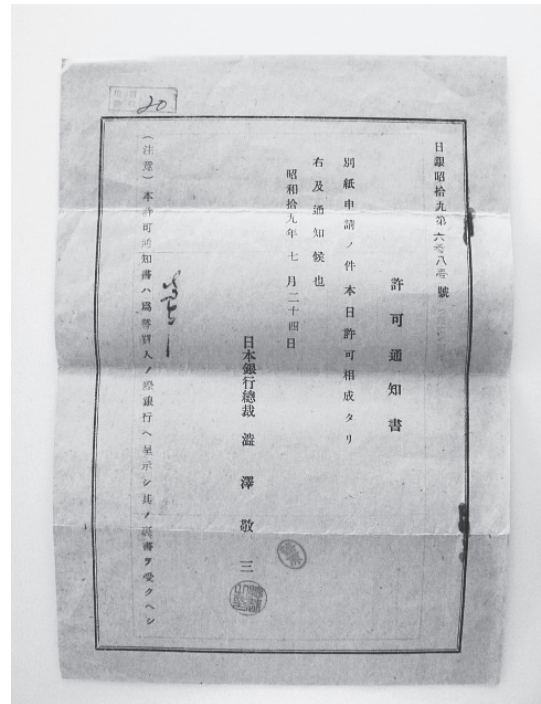


図5 許可通知書

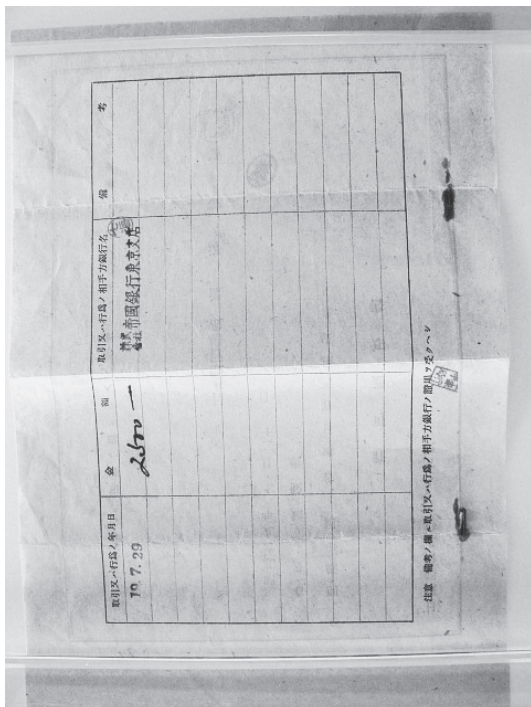


図6 電信送金受取証(表)

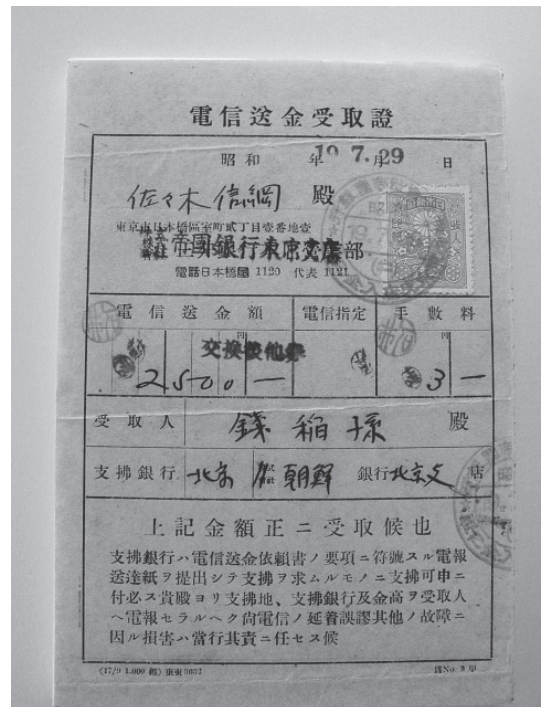


図7 電信送金受取証(裏)

上掲資料はすべて佐佐木信綱記念館の所蔵である。

